説教20200614フィリピ1：1-11　224　　362　　392

「ますます豊かに」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　さて、今日からフィリピの信徒への手紙の連続講解説教に入ります。新約聖書中で手紙が半分近くを占めているのには訳があります。それはイエス様の昇天後、この地の信徒たちは手紙を交わすことによって、聖霊の交わりを深めて、一つの教会を建て上げていったからです。手紙を交わすことの重要性は今を生きるクリスチャンにとっても変わりがありません。例えば、私たちはこの3か月間、この地にあって非常に困難な道を歩まされてきました。新型コロナウィルスの出現によって、教会に人々が集えなくされるなどどは、誰も予想していなかったことでしょう。主なる神は私たちの思いをはるかに超える試練を私たちにお与えになりました。しかし、一方で、主なる神は私たち思いをはるかに超えるかたちで救いの道を用意していてくださいます。

　主なる神の用意された救いの道のさきがけは既に示されています。私たちは、教会の外に散らされてしまった時、手紙をやりとりすることによって、私たちは聖霊の親しき交わりを深めることができたのではないでしょうか。私はそのように信じます。

　新約聖書に記されている手紙は、今を生きる私たちの実践に働きかけて来るものです。その手紙の多くはパウロによって書かれました。これから読んでいくフィリピの信徒への手紙は、パウロが牢屋に入れられているときに書かれて、信徒たちに届けられました。パウロとフィリピの信徒たちの間柄は、終生、良好で、その内容は喜びに満ち溢れています。喜びという言葉が何回も出てきます。しかし実はこのように問題のない良好な関係が保たれた教会のほうが少なくて、例えばコリントの信徒たちへの手紙に於いては、パウロはその教会の内部分裂を戒めることに終始しています。

　それはさておき、私たちは、パウロとフィリピの信徒たちが、どんな風にして終生変わることのない良好で、親愛に満ちた関係を築いていけたのかに興味がありますので、それに留意しながらこの手紙を読んでいきたいと思います。

　パウロという人は１２使徒以外の使徒で、直接イエス様に会うことなく回心をして使徒となりました。先週ニコデモという人の話をしましたが、パウロとニコデモにはいくつかの共通点があります。二人ともユダヤ人でファリサイ派に属し、ファリサイ派のリーダーでした。そして生きた年代も割と重なっていたと考えられます。しかし彼らの生き方は正反対でした。ニコデモと言いますと今の人たちにも親しみがあって、皆さん好意的に受け入れられておられる場合が多いように思います。ニコデモによる福音書という書物も記されていて、ニコデモはその後、回心してイエス様の弟子になったのだとする人たちもいます。又、私の通った東京神学大学ではニコデモ会という学生同士の親睦会があって、盛り上がっていました。決してパウロ会という親睦会はありませんでした。

　今の私たちがこのようにニコデモに親しみを覚えるのは、夜にこっそりイエス様に会いに行くといったような、ニコデモのメンタリティーと、今の世に生きる私たちのメンタリティーに多分に共鳴し合うところがあるからでしょう。

　ニコデモは**主にある命**と、**この世にある命**との間で揺れ動いていたのです。今の私たちにもはっきり言ってそういうところが御座います。そのような揺れ動く私たちは、パウロという人は特別の召し受けて回心して、特別のはたらきを任された特別の人だと思っていないでしょうか。しかし、この手紙を読んでまいりますと、当時の人は必ずしもパウロのことをそのようには思っていなかった。確かにパウロは人々のリーダーではありましたが、パウロを中心として人々の聖霊による親しき交わりは、ますます深められ、人びとは一つの教会の群れへとますます一つにされていったのでした。

　私たちを悩ます、**キリストにある命**と**この世の命**との間の葛藤は、この三か月間で私たちが実際に経験してきたことでもあります。この間になされた説教の説教題を私は感慨深く思い起こします。例えば５月１０日の説教題「**主がとこしえに与えられる土地で長く生きる**」はここに掲げられている年間聖句の言い換えです。５月１７日の説教題は「**留まる愛**」、５月２４日は「**すべての人を一つに**」でした。これらの題はヨハネ福音書から採られた聖句でありますので、私たちは、その意味するところに絶えず思いを致す必要があります。イエス様の愛に留まるということは、今の世の中に氾濫している、不倫につながるような安易な愛ではありません。又、イエス様がなされようとしている、すべての人を一つにされる、ということは、決して私たち人間が一様にマスクを着けて、同じような生活様式を身につけることによって実現されることではないのです。

　このようにキリストにある命と、この世の命との間には、**似て非なる事柄**がたくさんあります。その間で私たちはどうしても、ゆり動いてしまうのです。

　さて、パウロは生涯の間で３回の伝道旅行をしました。聖書の巻末の「パウロの宣教旅行1、そして2,3」をご覧いただければ分かりますように、これらの旅行は全てアンティオキアという街を起点にしています。アンティオキアはユダヤ人とギリシャ人が交わり合う重要な町で、宗教上でも大きな出来事が起こった街です。パウロは初め、このアンティオキアの町で、**ユダヤ人たちに対して**キリストの福音を宣べ伝え始めたのです。そしてパウロの第一回の旅行は、小アジアに住む**ユダヤ人たちへの**伝道旅行でした。そして第二回第３回の旅行は、ローマ帝国内のユダヤ人以外のいわゆる異邦人に向けての伝道旅行でした。

　つまり、パウロは、第一回の旅行を終えてアンティオキアの町に戻ってから、第２回の異邦人伝道に赴くまでの間に、何らかの出来事があって、ユダヤ人伝道から異邦人伝道へと方向転換させられたのです。つまり最初パウロはニコデモのような、いわば身内のユダヤ人たちに対してキリストの福音を告げ知らせ、多くのユダヤ人たちがそれを受け入れました。それから方向転換して、伝道の対象を異邦人へと変えたのです。

　この方向転換は、パウロ自身にとっても大きな飛躍であった思います。　この方向転換はパウロ自身のユダヤ人としてのアイデンティティを揺るがすような一大事であったように思います。ユダヤ人であることの目に見える証しとは何でしょうか。それは今のユダヤ人でもそうなのですが、自分たちが割礼を受けた者の一族であるということです。一方で、クリスチャンであることの証しとは何でしょうか。それはもちろん割礼のあるなしに関わることではなく、ただ私たちがイエス様を救い主として信じていて、それを公に言い表すことが、目に見える証しとなっているのです。そのことは使徒言行録15章11節に書かれていますのでご覧になって下さい。

　パウロの時代には、クリスチャンの間でも割礼のあるなしが大問題でした。アンティオキアで「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなた方は救われない」と説くクリスチャンの指導者がいたことが、使徒言行録15章1節に記されています。

　このようにキリスト教会とユダヤ教会とは、当時いわば未分化の状態にあったのですが、その状態を乗り越えるべくパウロは勇気ある第一歩を踏み出して、第二回の異邦人伝道へと旅立ったのでした。

　そしてその両者の架け橋というような存在がテモテという人物です。彼は、終生独身であったパウロが実の子のように愛した弟子でした。テモテは第二回第３回の伝道旅行をパウロと共にし、フィリピの街にも一緒に訪れました。テモテの父親はギリシャ人で、母親はキリスト教に改宗したユダヤ人でした。将にユダヤ教とキリスト教の架け橋のような人だったのです。又、テモテの母親は、パウロによってキリスト教へと導かれたと言われています。又、この獄中で書かれたフィリピの信徒たちへの手紙に「パウロとテモテから」と記されていることから、この二人は終生行動を共にしていたとも考えられます。このように信仰を同じくする者が、聖霊によってますますその間柄を深められていくということに、私たちは関心を持つことでしょう。

　そして、パウロが間柄を深めたのは一人テモテに対してだけではなく、すべての人に対してでした。１章４節からあなた方一同というように、一同という言葉が再三出てまいりますが、これは全ての人という意味で、あなた方すべての人達、という意味です。パウロが獄中に居ながら、この愛の手紙を、すべてのフィリピの信徒たちに対してしたためることができたのは、パウロが、イエス様の愛に留まっていたからというほかありません。そのことをパウロは八節で「わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証ししてくださいます 」というようにしたためています。実にキリストの愛は私たち「すべての人を一つに」する広くて深い無限の愛です。

　このようなキリストの愛にとどまり続けたパウロの身の上には、数多くの試練が降りかかってきました。そもそもパウロがこのように獄中につながれたのは、彼が異邦人伝道の働きの中で得た献金を、エルサレムのユダヤ人キリスト者の教会のために捧げるためにエルサレムに赴き、そこで誤解を受けて、告発されて捕縛された為でした。

　パウロは獄中にあっても喜んでいますが、我が身に受けたこのような試練については非常に現実的に対処し、常に神の義の実現を目指して行動しました。パウロが幾多の困難な状況の中で祈った祈りが９節から記されています。「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように」。あなた方の愛がますます豊かになるとはどういうことでしょうか。それは、私たちの身につまして言えば、この年間聖句にも現れています。新約におけるイエス様の**掟**とは、私たちが、互いに愛し合うことです。ですから、私たちはイエス様が言われる、互いに愛し合いなさいという**掟**を日々守りつつ、この地で長く生かされていくのです。パウロは私たちが愛し合うにあたってしきりに、**見抜く力、見分ける力**を強調しています。それは先ほども申しました**キリストの命**と**この世の命**との間で揺れ動く私たち人間の危うさをパウロが熟知していたからでありましょう。しかしそのパウロにとっても本当に重要なことが完全に分かっていたわけではありません。パウロは続けます。「そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」私たちにとって本当に大切なことは、キリストの日に、キリストによって与えられるまで、完全に知ることは出来ません。それはその日まで隠されているのです。私たちはこの地上生涯を全うするにあたっては、そのことを悟っていなければなりません。そしてイエス様の掟に従順に従いながら日々を過ごし、やがてきたるキリストの日を、喜びをもって待ち望んでいくのです。

祈ります。

天の父なる神様。この主日に御前に、この兄弟姉妹たちとともにあなたを賛美することができます幸いに感謝します。私たちが聖霊に満たされて、また新たな命に活かされますことを感謝します。私たちが、互いに愛し合いなさいというあなたの掟を守って、この地を歩んでいくことができますように。私たちがますます豊かに、あなたの愛に満たされて、互いに諭し合うことができますように。そして本当に重要なことを見分けることができるように、互いに助け合うことができるようにしてください。

　この地にある諸教会を一つにして下さい。殊に、九州教区議長 日下部けんじ師を導き、その按手の業を祝福し、その選びのうちに教区を一つの群れと成していくことができるようにしてください。私たちが一つの公同の教会にあって、ともに喜ぶことができますように。　この地における分裂、争いに目を留め、あなたの正しい支配を及ぼし、私たちが主の平和と救いにあづかることができるようにしてください。

　今、孤独を感じ、助けを必要とされておられる方々に目を留めてください。その方々に必要な慰め、癒し、励ましが与えられ、また私たちが新たな命に歩むことができるようにして下さい。父と聖霊と共に一体であって、代々に生き支配されています主イエス・キリストのみ名によって祈ります。